少年は何を目指して成長するのか：アニメ映画を手がかりに

大橋　稔

はじめに

女性を周縁化し抑圧する文化は，別の表現をすれば男性が中心を独占し優遇される文化である。そのような文化は，その体制を引き継ぐ者を育成することによって，維持し続けているのである。もちろん体制の後継者として名指しされているのは，少年である。少年は男性の子ども版ではない。少年は男性になるために，育て上げられ，その期待に応えて成長しなければならないのだ。つまり女性を抑圧する文化を維持するためには，後継者としての少年を成長させ，男性を作りあげる必要があるのだ。

このような視点に立つ時，少年はどのようにして成長するのか，どのような成長が期待されているのかを解明することは，女性に抑圧的な文化構造を解体するために必要なプロセスの一つになると考えている。本稿の目的は，日本という女性に抑圧的な文化で，少年にどのような成長を期待しているのかを探ることである[1]。そして女性などの他者を抑圧しない，人権にセンシティブな社会の創造を考えるための一助としたい。

少年を成長させる要因は，さまざまに考えられる。日々遭遇する具体的な体験や，学校などでの教育，親などの周囲から向けられる視線などである。少年たちは身近な，親密な関係にある人々からの期待に応えようとすることで，成長を遂げているのである。また少年の成長に期待を寄せているのは，周囲の人々だけではない。文化や社会などの体制も期待を寄せるのであり，メディアもまたさまざまなメッセージを投げかけている。少年たちを取り巻くさまざまなゲームや物語なども，彼らの成長の方向性を示しているのである。

本稿では，少年に成長の方向性を伝えているツールとして，アニメ映画を取り上げる。アニメ映画が持つ，物語性と，視覚と聴覚を直接的に刺激する伝達方法，さらには映像ソフトの低価格化や映像配信サービス技術の発展により，繰り返し視聴することが可能になった今日的状況において，子どもたちにより大きな影響とメッセージを伝達する媒体になり得るからだ。そのようなアニメ映画が，少年の成長の方向性をどのように示しているのかを考察することは，本稿の目的にとって意義あることだと考

えている。

分析対象とする作品選択の基準としたのは，日本のアニメ映画であること，少年を主人公にしていること，そして幅広い層に受け入れられていることであることである。日本で制作された作品に限定したのは，日本という文脈において示されている少年の成長の方向性を考えることを本稿の目的としているからだ。また少年を主人公としている作品から選択したのは，より少年の成長というテーマが扱われていると考えたためである。子どもが視聴するアニメ映画の選択には，大人の影響が大きい。そこで幅広い層に受け入れられた作品に限定することにした。以上の観点から本稿では，『天空の城ラピュタ』(1986年公開)，『STAND BY ME ドラえもん』(2014年公開，原作は1970年代)，『君の名は。』(2016年公開）の三作品を分析することにした。『君の名は。』については，幅広い層に受け入れられているのかについては若干の疑問が残るが，日本のアニメ映画としては興行収入が歴代3位であることをもって幅広く受け入れられたと見做すことにした。またこの作品は，最近の少年の成長の方向性を示すものであるとも考えている[2]。

はじめに分析対象としたそれぞれの作品に描かれた少年の成長の方向性を抽出し，その後それらを比較検討することで，少年の成長に何が求められているのかを明らかにする。そしてまとめとして，少年の成長の方向性としての妥当性と，新しい方向性を見出す可能性について検討を行いたい。

1. パズーの成長

『天空の城ラピュタ』は，宮崎駿が原案，脚本，監督を務めた作品で，スタジオジブリとして最初の作品である。「ある日，空から少女が降ってきた…」のキャッチコピーの通り，主人公である少年パズーが空から降ってきた少女シータを助けたことから始まる冒険物語である。そしてこの冒険を通じて，パズーとシータはそれぞれに成長を遂げていくことになるのだが，本稿では特にパズーの成長に焦点を当てながら考察を行うことにする。

さてパズーの人物設定について以下のように説明されている。

> スラッグ渓谷のはずれ，古い溶鋼炉を改造した小屋に住む，少年パズー。本編の主人公である。両親ともすでにこの世になく，鉱山の見習い機械工をして明るくたくましく生きている。性格はいたって素直で，機械いじりが大好き。冒険家であった父親の遺志を継ぎ，手づくりのオーニソプターでラピュタを発見することを夢見ていた。
>
> 12歳という年齢のわりには，洞察力にすぐれ，鉱山の荒くれ男たちにもまれて

育ったせいで土性骨の太い胆のすわった面も持ち合わせている。（『ロマンアルバム・エクストラ68 天空の城ラピュタ』114頁）

この設定から明らかになるのは，パズーは12歳という年齢であるにも関わらず，既に両親を亡くしていること，見習の機械工をしながら生計を立てていること，そして父親の遺志を継ぎラピュタの発見を夢見ていることである。つまりパズーは，既に経済的には自立した少年であり，自らの意思で決定することが許された少年であり，またラピュタの発見という大志を抱く少年であったことがわかる。そしてその大志を果たすために様々な困難を乗り越えることで達成される，パズー自身の成長の過程が物語では描かれることになる。

パズーの未熟さについて物語では次のように表現されている。これはシータを軍隊から守ることができず家に帰ってきた時，パズーの家が軍隊と同じくシータを狙う海賊のドーラ一家に占領されていた場面である。

「ぼうや，ちょいと借りているよ」
　テーブルには膨大な食料を積み上げ，海賊ドーラ一家が食事をしていた。
　軍の手は巧みに逃れたらしい。
「出て行け！　ここはぼくの家だぞ」
「えらそうな口をきくんじゃないよ。娘っ子一人守れない小僧っ子が」
（中略）
「その金で手を引けっていわれたんだろう」
「……」
「どうだい，図星だろう」
「シータがそうしろっていったんだ。だから」
　パズーの声が小さくなった。
「で，いじけて，のこのこと帰って来たというわけかい」
　ドーラは両手で机をひっぱたいた。
「それでもお前は男かい！」（前篇164-165頁，下線引用者。以下同じ）[3]

ドーラにとってパズーは，シータを守ることができなかった「ぼうや」なのであり，それは男ではないことを意味していた。この物語において，少女は守られるべき存在であり，少女を守る力を持った者が成長した男性としてみなされているのだ。このようにして自身の不甲斐なさを実感したパズーは，シータを救うため，そしてラピュタを発見するために，ドーラ一家と共に冒険に出発するのである。

さて冒険を通じて成長を遂げたパズーに対するドーラの評価は次のように変化す

る。この時パズーは，軍隊によって捉えられてしまったドーラ一家を救いにやって来た。そしてシータの救出に向かおうとするパズーにドーラは，隠し持っていたランチャーを渡すのである。

「でも，おばさんが逃げるときに……」
「いいんだよ，他にもたくさん隠してあるさ」
　むろん，そんなにはない。そのことに気づいたパズーだが，シータを助けるためには，ランチャーは必要なものだった。
「ありがとう」
　頬の血を拭おうともせず穴にもぐっていくパズーを見送ったドーラは，ナイフをシャルルに渡しながら，不意に表情を崩した。
「急に男になったねえ，ヒヨコだと思っていたら」（後篇131頁）

「ヒヨコ」だと思っていたパズーへの評価が「男」へと変わったのである。つまりここでパズーは成長を遂げたことが示されているのだ。シータ救出のための冒険に出る場面から，このドーラ一家救出の場面の間に，パズーは成長を遂げたことになる。この間に生じた出来事を見ることによって，この物語で示された少年の成長のための課題が浮き彫りになるだろう。この間にパズーは，軍によってさらわれたシータの救出と，ラピュタを発見し到着するという二つの大きな出来事を経験している。

一つ目のシータ救出であるが，この時パズーは，ドーラと共にフラップターと呼ばれる飛行体に乗って彼女が監禁されている軍の要塞へと向かう。軍からの攻撃をかわしながらの救出作業となったわけだが，途中で飛んできた煉瓦がフラップターを操縦していたドーラに直撃し，ドーラは気を失ってしまった。その結果，パズーがフラップターを操縦しなければならなくなるのだが，フラップターに乗ったのですら初めてのパズーは，見様見真似で操縦しなければならなかった。

この時のパズーの心情について，「自分一人でもやってやる，そんな思いがたぎってきた」（前篇57頁）と説明されている。シータを軍隊にさらわれた時パズーは，まだ幼く力がないことを理由にシータを救えなかった現実から目を背けようとした。しかしこの時パズーは，彼女を救い出すという責任を自覚したのであり，精神的な成長を遂げたのだと言える。彼の奮闘の結果，意識を取り戻したドーラの助けを得ながら，シータの救出に成功する。

もう一つのラピュタの発見と到着についてであるが，この点に関してはパズーの父の存在が大きな意味を与えている。パズーの父は，前掲の人物設定にある通り，冒険家であり既に他界している。冒険家の父は，周囲からとても人気のある颯爽とした人物であった。そんな彼は，空に浮く伝説のラピュタの写真撮影に成功し，それを公表

した。しかしその写真を誰も信じず，詐欺師扱いされ，失意のうちに亡くなってしまったのである。

父の他界以来パズーは，ラピュタを自分の手で発見し，父の無念を晴らすことを固く決意していた。そのためにパズーは，鉱山の見習い機械工として働きながら，オーニソプターを作り，旅立つ日を夢見ていたのであった。両親を亡くした12歳の少年が一人で働きながら生活を続けることができたのは，そのような夢を持っていたからだった。そんなパズーがシータと出会い，そしてドーラ一家と出会うことで，状況が一変し，ついにラピュタを目指して旅立つことになったのだ。

軍の要塞からシータを救出するためにパズーは，海賊船タイガーモス号の一員となった。そしてシータを救出した後もラピュタを目指して，ドーラ一家と行動を共にすることになった。その間パズーは，タイガーモス号の機関室の助手として働きながら，ドーラ一家の信頼を得ていくことになる。

ラピュタがあるとされている竜の巣に遭遇した時，パズーはタイガーモス号に引かれる監視台でもある凧に乗っていた。そして竜の巣を目の前にして躊躇するドーラを，電話を通じて説得し，竜の巣の中へと突入する決意をさせる。その結果，パズーとシータを乗せた凧もまた，タイガーモス号に引かれながら竜の巣の中へ突入することになった。しかしその瞬間，凧と機体を繋いでいたロープは切れてしまう。そして自然の猛威を前にパズーの意識は薄れていった。その時パズーは，現実とも幻覚ともつかない光景を目にすることになる。

> 飛行船から誰かが手招きしていた。踊る「群竜」の間を飛行船が抜けていった。それを追うように凧が滑り出した。
> 〈飛行船に乗っていたのは，父さんみたいだった〉
> そう思ったときには，ガックリと体を預けるシータを右腕に抱え込んだまま，操縦桿に突っ伏していた。（後篇102-103頁）

そして意識を取り戻した時，パズーはラピュタにたどり着いていたのだった。

この場面は，パズーが父によって導かれながら父が切り拓いた道を進むことによって，ラピュタを発見したことを示している。そして幻影の父が姿を消した後もその道を進み続けたパズーは，父が果たすことができなかったラピュタへの到着を達成したのである。それは父が詐欺師ではなかったことを証明し，父の汚名を晴らすことになる。つまりパズーは，夢を実現したのである。

さらに重要なことは，彼らを乗せた凧がタイガーモス号から切り離されており，パズー自らが操縦していたという点である。社会が成長していくためには，次の世代が前の世代を追い越す存在に成長しなければならない。それがなければ社会が発展して

いくことはあり得ないのである。これを個人の次元で考えるのであれば，息子とは父の背を越えなければならない責任を負っていると言いかえることも可能だろう。本船から切り離された凧に乗ってパズーがラピュタに到着したことは，パズーが自らの力で父の背を乗り越えたことを象徴的に示しているのである。

『天空の城ラピュタ』におけるパズーの成長を考察すると，自らの力で，一人でもやり遂げるという精神を持つことと，父の背を越えることとが，少年の成長には必要な要素と考えられていることがわかる。またドーラの「男になった」という言葉が象徴的に示しているように，少年が成長することは男という役割を担う存在になることだと考えられていることも明らかになる。

2. 野比のび太の成長

『STAND BY ME ドラえもん』は，藤子・F・不二雄原作の『ドラえもん』7作品を一連の流れのある物語としてまとめた3DCGの映画作品である。監督は八木竜一と山崎貴が務め，山崎は脚本も担当している。藤子・F・不二雄の手による「ドラえもん」は多数存在するが，本作で採用された7作品を通じて観ることで，ドラえもんとのび太の始まりから終わりまでをたどることになる。つまりこの映画を観ることで，子孫に不幸の元凶と言われたのび太がどのように成長したのかを確認することができるのだ。

さて野比のび太とはどのような人物なのか。佐々木宏は『新訳『ドラえもん』』において，次のように説明している。

> 野比のび太，10歳。そのあまりのダメダメぶりには，開いた口がふさがらなかった。学校で彼の定位置は廊下と決まっていた。遅刻の常習犯だ。勉強はできないし，しない。自宅の机は，居眠りのためだけの寝床だった。スポーツもからっきしだ。仲間と野球をするとバットは空を切るばかりだし，腹に打球を受けて悶絶したこともあった。
>
> 自宅近くの空き地の土管が，彼の遊び場。友人のジャイアンは，図体のでかい乱暴者。スネ夫は大金持ちの子息で，鼻もちならない。この2人の友人兼いじめっ子から彼を守ってくれるのが，しずか。のび太は，このしずかが好きでたまらない。
>
> が，同級生には，勉強も運動も抜群にできて，しかもイケメンな出木杉がいたりする。(20頁)

そしてこの「ダメダメ」なのび太を世話し，手助けするために孫の孫であるセワシか

ら遣わされてきたのが，ドラえもんなのである。のび太とドラえもんの出会いの場面でのび太は，変化すること，成長することを要求されることになるのだが，この点について次のように説明されている。

セワシ：君の残した借金が大きすぎて，百年たっても返しきれないんだよ。
だから，僕のうちはとっても貧乏で…。今年のお年玉がたった五十円。
のび太：すまないなあ，君たち子孫にまで迷惑をかけて…。
ぼ，僕は…。僕はもう，生きてるのが嫌になっちゃった。
ドラえもん：そんなに気を落とすなよ。
セワシ：運命は，変えることだってできるんだから。
のび太：ほんと⁉
ドラえもん：僕らはそのために来たんだ。（45頁）[4]

このやり取りから，のび太が「ダメダメ」でなくならなければ子孫に迷惑をかけ続けることになってしまう，だから変わらなければならないとセワシやドラえもんが考えていることが明らかになる。つまり，成長とは本人だけの問題なのではなく，未来への責任であるとの考え方を読み解くことができるのである。この考え方は，のび太自身にも共有され，内面化されていくことになる。いつまでたっても変わらず「ダメダメ」なのび太は，自身に嫌気がさし，逃げ出すことを決意する。

のび太：じつは，今日学校で…。
先生：君にはつくづくあきれた。同じ小言を何度言わせるつもりだね。ほんとにもう…。そんなことじゃろくな大人になれんぞ‼　先生は断言する‼
のび太：言われてみればそうかなあと。
ドラえもん：なるほど…。
のび太：だから，僕なんかのお嫁さんになれば，しずちゃんは一生不幸に…。
ドラえもん：そんな先のことを今から大げさに。
のび太：未来を変えるには，今から手をうたなくちゃ駄目なんだ‼　つらいけど，ほんとにしずちゃんの幸せを願うなら…。やるべきだ‼　でも，うまく別れられるかなあ。自信ないなあ。そうだ！　遠くへ離れよう。（72-73頁）

のび太は自らの成長の結果が，自分の人生だけではなく，将来のパートナーの人生にも大きな影響を与えることを自覚している。それ故に，自身の成長が見込めないのであるならば，将来のパートナーの目の前から姿を隠し，そしてパートナーとならな

いようにすることが未来への責任であると考えるようになったのである。これは現実からの逃避であり，何の問題解決にもならないのではあるが，自分が「ダメダメ」のままでは駄目だということを理解し，未来への責任を果たすために何かをしなければならないと考えるようになっているという点においては，一つの成長と考えることもできる。特にこの直前の物語で，ドラえもんの秘密道具を使ってしずかの気を引こうとしていたことと比べるなら，格段の成長である。

しかし未来への責任を自覚しつつも，困ったことがあればドラえもんと秘密道具を頼りにしてしまう性格が改善されることなく，のび太は青年になる。そして14年後ののび太はしずかにプロポーズするが，彼女の返事は保留されたままになる。そんな中，しずかは雪山登山をするのだが，友人とはぐれ遭難してしまう。そのことを知った現在ののび太は，タイム風呂敷を使って14年後の自分に変身し，しずかの救出に向かう。しかしそこでも「ダメダメ」ぶりを発揮したのび太は，逆にしずかに助けられ，下山することになってしまった。しかしこれをきっかけにして，しずかはのび太のプロポーズを受け入れる決心をする。

青年しずか：のび太さんと結婚するわ。
青年のび太：あ，あ，ありがとう!!
青年しずか：そばについててあげないと，あぶなくて見てられないから。
　　のび太：こんなみっともないの嫌だっ，まっぴらだっ。
ドラえもん：だったらもう少し，たくましい男になるんだね。(97頁)

この場面から，のび太が目指す成長の形を読み解くことができる。しずかはのび太との結婚を決心した理由を，そばにいないと危なっかしいからだと説明する。しずかはのび太を守りたいと考え，結婚を決意したことになる。しかしこのような結末について現在ののび太は，こんなみっともないのは嫌だと言う。つまりのび太は，女性であるしずかに守られることは，みっともないことだと考えているのだ。これに対しドラえもんは，それが嫌ならたくましい男になれと言って，のび太に成長することを促す。ここから少年にとっての成長とは，女性を守ることができるたくましい男になることだという価値観を読み解くことができる。さらに，そのように成長できないことはみっともないことであるとしているわけだが，このことは成長とは単に個人の問題なのではなく，世間体の問題であることが示される。つまり成長したか否かを判断するのは，個人なのではなく他者の視線であることが明らかとなるのだ。さらに踏み込んで解釈するなら，成長の在り方は社会によって決定されているのであり，その規定に自分を合わせることが成長なのである。

この出来事を通じて，のび太はしずかと結婚することになった。それはセワシが不

幸である未来とは異なる出来事であり，未来を変えたことになる。これによりドラえもんが未来から遣わされた目的は達成したことになり，ドラえもんが未来に帰る日が近いことを意味する。ドラえもんが未来に帰らないよう何とかして欲しいとのび太は両親に泣きつくのだが，ここでさらに成長のための課題が示される。

のび太：なんとかして。
のび太ママ：ドラちゃんにはドラちゃんの都合があるのよ。我儘言わないで。
のび太パパ：人に頼ってばかりいては，いつまでたっても一人前になれんぞ。男らしく諦めろ。
のび太パパ：のび太がすっかりお世話になったね。
ドラえもん：いえいえ。
のび太ママ：明日の朝行っちゃうの？　寂しくなるわ。（124頁）

のび太パパは，人に頼っていたのでは一人前になれないと言う。つまり成長するということは，人に頼らないことだという価値観がここで示されているのだ。そして頼りにする存在を失うことを受け入れることも男らしさの一部だという考えも示されている。このことは何かを切り捨てる決断ができることも男らしさの一部だと言っていると考えることもできるだろう。さらにこの日の夜，別れを目前に控えたドラえもんは，次のようにのび太に語り掛ける。未来を変えたことが判明したとはいえ，未だ「ダメダメ」のままであるのび太をドラえもんは心配しているのである。

ドラえもん：できることなら…，帰りたくないんだ。君のことが，心配で心配で…。ひとりで宿題やれる？　ジャイアンやスネ夫に意地悪されても，やり返してやれる？
のび太：バカにすんな！　ひとりでちゃんとやれるよ。約束する。（125頁）

ひとりでできるかと心配されることは，未熟であると見做されること，成長していないと見做されることであり，それは馬鹿にされることと等しいとのび太は考えているのだった。眠れないのび太は夜の散歩へと出掛け，そこでジャイアンに出くわす。ジャイアンに因縁をつけられたのび太は，ドラえもんの助けを呼ぼうとするのだが，咄嗟にやめる。

のび太：喧嘩ならドラえもん抜きでやろう。
ジャイアン：ほほう…。偉いな，お前。（127頁）
ジャイアン：何度やっても同じことだぞ。はあ，はあ。いい加減に諦めろ。

のび太：僕だけの力で，君に勝たないと…。ドラえもんが安心して…。帰れないんだ！
ジャイアン：知ったことか！（129頁）
ジャイアン：いてて，やめろってば。悪かった，俺の負けだ。許せ！
ドラえもん：のび太くん！
のび太：勝ったよ！　僕。見たろ，ドラえもん。勝ったんだよ。僕ひとりで。もう安心して帰れるだろ，ドラえもん。（130頁）

この場面でのび太は，ドラえもんを頼るのをやめ，ジャイアンとの喧嘩に自力で勝つのである。その背景には，のび太のドラえもんを安心して未来に帰したいという思いがあった。この時のび太は，「ダメダメ」な状態を脱し，成長を遂げたことになる。つまり誰かのため，という思いがのび太の成長を促したのである。このことから成長を促す鍵は，誰かのためという思いの獲得にあるとの考えを読み解くことができる。

のび太の成長を考察すると，『STAND BY ME ドラえもん』において示されているのは，未来のための責任を自覚することが成長を促す役割を果たし，一人で何かを成し遂げられるようになることが成長を示す重要な要素となっていることであった。またそれは，男らしさとして目指されるべき姿だとのび太自身が内面化しているものでもあった。そしてその成長は，他者を思いやる心を原動力として成されることが期待されていることも分かった。

3. 立花瀧の成長

『君の名は。』は，新海誠が原作，監督，脚本を担当したアニメ映画である。主人公である東京に住む立花瀧と飛騨の山奥に住む宮水三葉は共に高校2年生である。この物語は，主人公の男女が時空を超えて入れ替わる，とりかえばや物語である。三葉が住む糸守町は，1200年ぶりに大接近する彗星によって消滅する運命にあった。三葉の3年後を生きていた瀧はこの事実を知り，町の人々を救うために三葉とその友人たちと力を合わせて奮闘する姿が物語では描かれている。

この奮闘を通じて，瀧も三葉もともに成長を遂げるのだが，本稿では瀧の成長に焦点を当てて考察を進める。瀧の人物設定については，次のように説明されている。

東京の都心に暮らす男子高校生。〔2016年の時点で東京都立神宮高校の2年生で，三葉より3歳年下。〕父親とふたりでマンション暮らし。少しケンカっ早いところがあるが，気のおけない友人たちである司や高木とともに楽しく高校生活

を送っている。放課後にはカフェに寄ったり，イタリアンレストランでアルバイトをしたり。バイト先の女子大学生の奥寺先輩へひそかに好意を寄せているが，恋愛には奥手。建築や美術に興味を持っていて，自宅の部屋にもその手の本が並んでいる。(『新海誠監督作品 君の名は。 公式ビジュアルガイド』88頁，〔　〕内は引用者)

このような設定に加えて説明するなら，瀧は基本的にその場その場を流されるかのように過ごす「今時の」高校生でもある。何かに積極的に打ち込むわけでもなく，また何かに取り立てて不満を感じるわけでもなく，その時々を友人や仲間たちと楽しく過ごしているのである。このような瀧の姿を，無関心という言葉で形容しても問題ないだろう。この無関心な状態を脱し，糸守町の人々を救うために奮闘するようになることこそが，この物語で示される瀧の成長だと言える。

さて糸守町が消滅することを知った後，瀧は三葉と入れ替わる。ここで瀧は目的を達成するために乗り越えなければならない壁に突き当たる。1200年ぶりの天体ショーに湧く風潮の中，その事実をどのようにして知らしめるのかということである。過去に自身も入れ替わりを体験したという三葉の祖母ですら，隕石が落ちて糸守町の人々が死んでしまうという話を信じてはくれなかった。

――そんなことは誰も信じないって，意外に普通のこと言う婆ちゃんだな。

高校までの道を駆け下りながら，俺はぶつぶつとそう思う。

入れ替わりの夢は信じるクセに隕石落下は疑うって，どういうバランス感覚なんだあの婆ちゃん。

完璧に遅刻の時間で，周囲には人影がほとんどない。ぴーちくぱーちくと山鳥の声がこだまする，いつもの町の穏やかな朝だ。俺たちでやるしかない，と俺は思う。

「絶対に，誰も死なせるもんか！」

自身に言い聞かせるように，俺は強く口に出す。走る速度を上げる。隕石落下まで，あと半日もないのだ。(159頁)[5]

しばらく起きていなかった入れ替わりを，三葉たちを救いたいとの一心から自らの意思で引き起こし，自分の境遇を理解する三葉の祖母と出会ったことで，うまく事が運ぶと思っていた瀧だった。しかし祖母の反応からことの難しさを理解し，自分たちの手で成し遂げなければならないと決意したのである。ここで瀧が言う「俺たち」とは，三葉の友人の勅使河原克彦（テッシー）と名取早耶香（サヤちん）の二人である。二人に彗星の話をしたときの反応は対照的であった。

かと思ったが，テシガワラに関しては，それは杞憂だった。
「……三葉，それ，マジで言っとんのか？」
「だから，マジだってば！　今夜，ティアマト彗星が割れて隕石になる。それが高い確率で，この町に落ちる。情報ソースは言えないけれど，確かな筋からの話だよ」
「そりゃ……一大事や！」
「ええええ，ちょっと，テッシーなに真剣な顔しとんのよ，あんたそこまでアホやったの？」
当然，サヤちんは取り合ってくれなかった。（161頁）

町の破壊や学校の転覆を寝る前に妄想しているというテッシーは，瀧の話（それを信じてるのか否かは別にしても）に乗ることは何の問題もなかったようである。しかし常識人であるサヤちんには到底共感できる内容ではなかった。そこでサヤちんを買い物に行かせ，その間に瀧とテッシーの二人で計画を立てることにする。

立案しなければならないのは，三年後の世界で消滅したとされる地域の人びとを避難させるための方法であった。この時テッシーの普段からの妄想が功を奏し，町の無線機を乗っ取り，避難訓練として町の人びとを避難させるという計画がまとまった。その計画を聞いてもなおサヤちんは，仮定の話としてしか考えていない。そんな彼女を納得させたのは，糸守湖が1200年前に隕石の落下によってできた湖である可能性があることを示した町のホームページの記事だった。過去に起きた可能性があるという事実が，常識人の態度を変えたのである。こうして「俺たち」の結束が完成したのである。

「いいねテッシー！」
思わず拳を突き出すと，テシガワラも「おお！」と拳を合わせてくれる。
いける。これはいける！
「やろうぜっ，俺たちでっ！」
俺たちはサヤちんに向かって，つばを飛ばす勢いで声をそろえた。（171頁）

さてこれで計画を実行するための結束を作りあげることができたわけだが，それでも瀧にはやらなければならないことがあった。町長である三葉の父を説得し，協力を取り付けることであった。彼らの計画は避難のきっかけを作ることはできても，180世帯の町民を確実に避難させるためには，役場や消防などの協力が必要だと考えたのである。町長の説得に向かう瀧は，「娘の私からちゃんと話せば，きっと分かっても

らえると思う」(170頁）と安易に考えていた。しかし実際は容易ではなかった。

「……なにを言ってるんだ？　お前は？」(中略)
「信じられない話だっていうのは分るよ。でも，ちゃんと根拠だって……」
「よくもそんな戯れ言を俺の前で！」(中略)
「本気で言っているなら，お前は病気だ」
「……なっ」(中略)
「市内の病院で医者に診てもらえ。その後でなら，もう一度話を聞いてやる」(中略)
「――バカにしやがって！」(172-174頁)

瀧と三葉の父との話し合いは，病人扱いされたことに瀧が怒ったことで物別れに終わってしまった。しかしこの物別れは必然であったと言える。この計画は，「俺たち」で達成することが目指されていたはずである。しかしその計画を達成するために瀧は，町長の力を頼ろうとしたのである。さらに町長の力を引き出す根拠を，娘であることに求めていたのだ。これではこの計画が「俺たち」で達成されたことにはならない。また父親の力に頼るということは，父親の背を越えるという少年の成長の課題と反する行為でもあるのだ。

さて計画を遂行する途中で瀧と三葉は元に戻ってしまう。そのため，瀧自身によってこの計画が成功に導かれることはなかった。糸守町の人々の救出は，瀧から引き継いだ三葉たちの手によって成し遂げられるのだ。このように考えると，瀧は自身の手によって困難を乗り越えたことにはならなくなる。

しかしこの出来事は，瀧に確実に変化をもたらし，成長させたと言える。三葉や糸守町の人々を守ろうとすることで，瀧は積極性を獲得したのである。少なくとも瀧自身が積極的に行動できる人物であることを示したのだ。さらに瀧はこの時，「俺たち」という表現から分かるように，友人を獲得し協力することを学んだのである。この学びこそが瀧の成長の要だとも言える。そしてこの協力が，瀧を無関心な状態から抜け出させたのである。

今までだって，友だちだと思っていた。でもそろそろ実際に会って，男子として，こいつらと話がしたい。俺と，三葉と，テシガワラと，サヤちんと。司や高木や奥寺先輩も一緒だったりしたら，それも絶対に楽しい。(166頁)

瀧は，三葉として三葉の友人であるテッシーやサヤちんとの関係を築いてきた。それを本当の姿で改めて出会い，友人として過ごすことを望むまでになっていたのだ。

さらに瀧には瀧の世界の藤井司や高木真太などの友人が居て，奥寺ミキというバイト先の先輩も居る。なんとなく共に過ごしてきた仲間であったが彼らは，瀧を心配し，飛騨まで無計画に同行するような友人だったのである。このような友人の存在に気づき，協力する姿勢を獲得したことが，瀧の成長であったのである。

『君の名は。』における瀧の成長は，目標を達成したという結果が少年の成長のために重要なわけではないことを示している。むしろ目標を目指す過程において，何を成し，何を獲得したかの方が重要だと考えられているのだ。瀧が獲得したのは，無関心を脱することと，協力する仲間，友人だった。この仲間たちは同じ目標を共有している。だからこそ瀧は，自分で始めた糸守町の人々を救出するという目標を，三葉に託すことができたのである。『君の名は。』における女性たちは，瀧にとって単に守るだけの存在ではなく，目標を共有し協力する仲間なのである。

4. 成長した少年に期待されていること

『天空の城ラピュタ』のパズー，『STAND BY ME ドラえもん』ののび太，そして『君の名は。』の瀧は，それぞれ異なる個性を持った少年であった。パズーは，12歳であるにも関わらず，既に独立した生活を送り，好奇心旺盛な身体能力に優れた少年だった。一方のび太は何をやらせても「ダメダメ」で，すぐにドラえもんに頼ってしまう10歳の少年で，瀧は特に不満を抱えることもないが，何かに強い関心を持ち，積極的に行動することのない，今どきの無関心な高校2年生だった。

そのような三人は，それぞれの方法で成長を遂げる。しかし彼らの成長は，何かを成し遂げたいという意思を獲得することによって始まることでは共通していた。パズーの場合は父の汚名を晴らすことであり，のび太の場合はセワシという子孫の幸せであり，瀧の場合は入れ替わりが起きなくなった三葉と会いたいというものだった。のび太の場合は，さらにしずかの幸せという課題も追加されるが，これもまた大きな観点からすればセワシの幸せという目的に収斂されるものである。成長とは，課題や難題を乗り越え（ようとす）ることによって達成されていくものである。そのため積極的に行動する意思が，成長には欠かせないのである。

さらに三人に共通しているのは，この目的を達成する過程でさらに大きな視点を獲得していることである。パズーにとってそれはシータを救出することだった。この点だけを見れば決してより大きな視点とは言えないかもしれない。しかしラピュタの科学技術を用いて莫大な軍事力を手にしたり，世界を征服したりするためにシータを利用しようと目論む勢力から彼女を救い出すことは，その勢力を削ぐことでもあった。つまりシータを救い出すことは，世界を悪意のある勢力から守ることになる。このように考えるとパズーの行為は，より大きな視点を獲得しての行動だと言える。

またのび太の場合，ドラえもんを安心させたいと考えたことが，彼が獲得したより大きな視点になる。のび太は未来を変えるために自分自身が幸せになり，自分の人生を充実させることが必要だと考えていた。つまりのび太は，自分を中心に据えた思考法により，自分のために変化や成長を望んでいたのだ。このような考え方から，ドラえもんのためという他者を中心に据えた考え方へ視点を移行させたのだ。これはのび太の視野が拡大されたと言って良いだろう。

瀧は三葉の行方を探る過程において，糸守町の過去（三葉にとっては未来）を知ることになる。その結果，三葉に会いたいという個人的な視点を，三葉や糸守町の人々を救出したいというより大きな視点に変化させるのである。さらに付け加えれば，瀧の場合は，その目的を友人と協力して成し遂げようとしたことから，協力して行動することの重要性という，より社会化された視点を獲得してもいるのだ。

より広い視点を獲得することは，少年が成長を果たしたと言うためには不可欠な要素となる。少年が成長した結果として，男性になることが期待されているからだ。日本の社会において男性は，社会で働き家族を養うという公的な領域での活躍が期待される性である。社会が変化し，そのような意識は大分緩和されているとはいえ，ジェンダーギャップ指数における日本の順位が底辺にとどまっている状況を鑑みるなら[6]，男性に対する無意識の固定概念が未だに根強いことは容易に想像できる。そのような社会に出る準備として，少年は成長の過程でより広い視点を身につけなければならないのである。だからパズーやのび太の成長が「男」という言葉で語られているのだ。

しかしそれでも日本の社会は変わりつつあるはずである。特に1999年に施行された男女共同参画社会基本法では，あらゆる分野に男女が共同して参画することを社会の目標とすることが定められ，さまざまな取り組みがなされている[7]。その結果，理念のレベルだけで考えるなら，男らしさや女らしさによって生き方が制限されることはなくなっている。この意味において，2016年に公開された『君の名は。』の瀧が，男らしさとしてではなく，協力する能力を得ることによって成長を考えられるようになったことは，社会的な意識の反映だと言える[8]。さらに付け足すならば，瀧に協力する仲間は，男子だけで構成されているわけではなく，女子も含まれていたことは示唆的である。

彼ら三人の成長を示す手段として採用された内容にも，共通点がある。パズーはラピュタで三度軍隊に捕らえられてしまったシータを救いに向かう時，ドーラからランチャーと薬包を受け取っている。ドーラ一家が逃げるために必要なものだと分かっていながら，シータを助けるためには必要だと考えたのであった。パズーを海賊の仲間にしてしまったことを悔やむシータに，「僕は海賊にならないよ」（後篇85頁）と言っていたパズーは，シータを守るために武器を手にしたのである。

のび太が自分は一人でも大丈夫なことを示すために選んだのが，ジャイアンに喧嘩で勝つことだった。パズーのように武器をとることはなかったにしても，のび太は自分の力を証明するために暴力を手段として選んだのである。この時のび太は，将来しずかが「そばについていてあげないと，あぶなくて見てられないから」(97頁）と言ってプロポーズを受け入れることを既に知っていた。それにも関わらず，喧嘩に勝つことで自分の力を証明し，ドラえもんを安心させようとしたのである。

瀧が用いた手段も，暴力であった。瀧が選んだのは，変電所を爆破し，町役場の無線を乗っ取ることだった。瀧の場合，人を傷つける可能性はかなり低いものであったし，180世帯もの人々を避難場所へと誘導するためには，他に手段がなかったのかもしれない。しかし瀧たちが選択した行為は犯罪やテロ以外の何物でもなく，それは暴力であった。

> おそるおそる，というふうにサヤちんが口を開く。
> 「か，かんぺき犯罪やに！」
> そう言いつつも最後まで残していた苺をぱくりと口に運ぶサヤちんに，「犯罪でもしないとこの範囲の人間は動かせないよ」とクールに言って，俺は地図の上に散らばったマーブルチョコレートを手でざっとどかしてみせる。そう，犯罪でもなんでもいいから，要はこの円の中の人たちを外に出せばいいだけなのだ。（中略）全部終わって，こいつらが無事でいてくれたら後のことはどうでもいい。生きてさえいれば，どうとでもなる。
> （168-169頁）

瀧たちは，これから行おうとしていることが犯罪に値することを十分に理解していた。しかし瀧は，人々の命を守る行為だとして納得しようとしていたのである。

斎藤美奈子は『紅一点論』において，アニメを「男の子の国」と「女の子の国」とに分けて分析している。彼女は，アニメ作品は想定される視聴者の性別によって内容がジェンダー化されていることを示した。また「男の子の国」で好んで用いられる言葉が「正義」であり，好んで採用されるイデオロギーが「ナショナリズム」であることを指摘している（34頁)。外部からの侵入者と戦い続けなければならない「男の子の国」のアニメでは，地球や「我々」の側こそが正義であり，地球や「我々」を守るためであれば暴力の行使が積極的に容認される。また地球や「我々」を守るために暴力を内包した力を持つことは，絶対的な正義なのである。このような価値観を内面化させることで少年たちは，家族や地域，会社，国を守るための「力」を正当化する大人の男へと成長していくのである。

つまり家族などを守る力を持たなければ，それは成長した大人とはみなされないの

である。だから雪山でしずかを救出することができず，逆にしずかに助けられたのび太の姿は「みっともない」と見做されるのであり，シータを軍隊に奪われたパズーは「小僧っ子」であり「ヒヨコ」なのである。一方，シータたちを追うために銃を使おうとするドーラの息子たちは「そんなもの使わなきゃなんないのかい」（前篇，123頁）と馬鹿にされるのに対し，シータたちを守るために「男なら拳骨で通ってみな」（前篇，123頁）とすごむ親方の姿は逞しく映るのである。パズー，のび太，瀧の三人が，人を守ったり安心させたりするとの名目において，暴力や法を破ることを厭わないという姿勢を獲得することは，彼らが成長するために必要なことだったのだ。

まとめ

社会は良い方向に発展する必要があると，人々は考え願う。より良い世界を創りたいと欲望するからこそ，人間はさまざまな発見や発明を繰り返し，社会を「進歩」させてきたのだ。そして次世代は自分達よりもさらに良い社会にして欲しいと願うからこそ，子どもたちの成長を期待しているのだ。本稿で考察の対象とした『天空の城ラピュタ』『STAND BY ME ドラえもん』『君の名は。』は，それぞれの方法で少年の成長のあり方を示していた。

これらの作品が示した少年の成長のあり方をまとめるなら，今よりも良い社会を目指し，より広い観点から判断する能力を身につけた男になれ，仲間と協力しながら目標に向かって前進する努力ができる男になれ，そして家族や国を守るために暴力の行使すら恐れない強い男になれということになる。パズー，のび太，瀧の三人は，それぞれの過程を経てこれらの能力を身につけ，成長を示したのであった。だからこそ，これらの作品は観客に感動を与え，支持を得ることができたのだ。

このような少年の成長の課題は，これらの作品によってはじめて提示されたものではない。むしろ「桃太郎」の昔話の時代から繰り返し考え，語られてきた課題である（斎藤，13-14頁参照）。特に，何かを守るための力を持てという課題は，少年に常に課されてきた課題だったと言えるだろう。しかしこれは，男性という性の逃れることのできない宿命なのだろうか。暴力を内在させたり，肯定したりすることなく，家族や国を守る別の方法はないのだろうか。

『STAND BY ME ドラえもん』には，のび太との結婚を翌日に控えたしずかが父親と話をする場面が描かれている。

青年しずか：あたし…，不安なの。うまくやっていけるかしら。
しずかパパ：やれるとも。のび太くんを信じなさい。のび太くんを選んだ君の判断は正しかったと思うよ。あの青年は，人の幸せを願い，人の不幸を悲しむ

ことができる人だ。それが一番人間にとって大事なことなんだからね。彼なら間違いなく君を幸せにしてくれると，僕は信じているよ。(112-113頁)

しずかの父親は，のび太の価値を力強さに求めてはいない。あるいは社会を発展させようとする意思や，努力する姿勢に求めているわけでもない。「人の幸せを願い，人の不幸を悲しむことができる」という共感する能力に価値を見出しているのだ。そしてその能力こそが娘を幸せにする力になると信じているのである。またしずかの父親がこの能力を，「男らしさ」として語るのではなく，「人間にとって大事なこと」と表現していることも注目に値する。男であることと，人間であることとは同義ではないのである。

このような父親に育てられたしずかは，のび太に守られることを期待して結婚を決めたわけではない。既に紹介したように，「そばについててあげないと，あぶなくて見てられないから」(97頁）というのが理由だった。のび太が男性役割にとらわれない生き方を選択したとしても，それがのび太の個性，のび太らしさとして受け入れられる素地は整っていたのだ。しかししずかやしずかの父親の真意がのび太に伝わることはなかった。だからのび太はジャイアンに喧嘩で勝つことで，自身の成長を示そうとしたのである。

また『君の名は。』の瀧の場合も，瀧と入れ替わった三葉の「女性っぽい」行動を受け入れる友人たちが描かれ，『天空の城ラピュタ』には楽しそうに船上で生活し，仕事をするドーラの息子たちの姿が描かれてもいる。このように考えると，少年の成長のあり方としての多様な選択肢は既に示されていた。これからはその多様な選択肢が持つ可能性を「みっともない」と見做すのではなく，ひとつの価値として尊重し得る社会的な視点が必要になるのだ。それが男性役割に合致するような成長を少年に強制するのではなく，少年が「一番人間にとって大事なこと」を目指して成長するのを促すことにつながるだろう。

本稿は2018年度城西短期大学女性学講座「映画から読み解くジェンダー文化」の第1回「男の子が成長するための課題 ── 映画『君の名は。』などに見る隠れたカリキュラム」での発表原稿を改題の上，大幅に加筆修正を施したものである。

《註》

1　もちろん社会を構成するもう一方の性である女性がどのようにして作られるのかも重要な課題となるが，これに関しては別稿の課題としたい。

2　『STAND BY ME ドラえもん』も公開年のみを考えれば最近の作品であるが，

原作としては1970年代となるため，幅広い層に受け入れられていると見做して良い。またそのため，最近の少年の成長の方向性を示しているか否かについては疑問が残るため，近年の作品として『君の名は。』を含めることにした。

3　引用は，セリフの書き出しとしてではなく，『小説 天空の城ラピュタ』の当該箇所から行うことにする。

4　引用は，『新訳『ドラえもん』』に収められた原作から行うことにする。そのため本稿での考察は，原作に対する考察が主となっていることを付記する。またセリフの発話者を：の前に追記する。

5　引用は，セリフの書き出しとしてではなく，『小説 君の名は。』の当該箇所から行うことにする。

6　ジェンダーギャップ指数とは，世界経済フォーラムが毎年発表している男女格差の度合いを示す指数。経済・教育・保健・政治の4分野14項目のデータに基づき各国の男女の格差を評価している。指数が「1」に近づくほど平等だと評価される。2018年版が2018年12月18日に発表されたが，日本の指数は0.662で149か国中110位，G7の中では最下位だった。

7　男女共同参画社会基本法の前文には，「男女共同参画社会の実現を二十一世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置付け，社会のあらゆる分野において，男女共同参画社会の形成の促進に関する施策の推進を図っていくことが重要である」と謳われている。また第二条第一項では男女共同参画社会の形成について，「男女が，社会の対等な構成員として，自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され，もって男女が均等に政治的，経済的，社会的及び文化的利益を享受することができ，かつ，共に責任を担うべき社会を形成することをいう」と定義されている。

8　本稿で引用したドラえもんの原作で使用されていた「男らしさ」などの具体的な性別を特定した性別役割に関する表現は，『STAND BY ME ドラえもん』においては変更されたり，削除されたりしている。これもまた男女共同参画社会基本法成立以後の社会的な意識の反映と言える。しかしのび太の「しずかを幸せにする」などの，性別を特定せずになされる性別役割に関する表現はそのまま使用されている。このことは男女共同参画に関する社会的な認識についての一側面を示している。つまり「男らしさ」「女らしさ」などの表現については問題があるという認識が浸透する一方で，個別具体的な性別役割に関する問題意識は低いままなのである。

《引用参考文献》

DVD『君の名は。』（監督：新海誠，制作：コミックス・ウェーブ・フィルム，発売：2017年）

DVD『天空の城ラピュタ』（監督：宮崎駿，制作：スタジオジブリ，発売：2002年）

DVD『STAND BY ME ドラえもん』（監督：山崎貴，八木竜一，制作：白組，

ROBOT，シンエイ動画，発売：2015年）
池田憲章 構成『ロマンアルバム・エクストラ68 天空の城ラピュタ』徳間書店，1990年
角川書店 編集『新海誠監督作品 君の名は。 公式ビジュアルガイド』角川書店，2016年
斎藤美奈子『紅一点論：アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』ちくま文庫，2001年
佐々木宏 著・藤子プロ 監修『新訳『ドラえもん』』小学館，2014年
新海誠『小説 君の名は。』角川文庫，2016年
内閣府男女共同参画局「男女共同参画社会基本法」http://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html，2018年12月20日閲覧
宮崎駿 原作・亀岡修 文『小説 天空の城ラピュタ』（全2巻）アニメージュ文庫，1986年
YAHOO!JAPANニュース「ジェンダーギャップ指数2018，日本は110位でG7最下位。「日本は男女平等が進んでいない」」（2018年12月18日配信）https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20181218-00010000-huffpost-soci，2018年12月20日閲覧
『STAND BY ME ドラえもん　3DCG』映画パンフレット，2014年